

# 石巻市田代島 いまこそ「観光」復興に 向けた支援を

古賀 学

## はじめに

平成二三年四月一四日及び一五日、初めて被災地に入った。仙台空港から塩竈、石巻、気仙沼、陸前高田、大船渡を経て釜石まで行き、仙台へ戻った。関西のNPO法人「市民活動情報センター」の今瀬政司さんとともに、「何ができるかの見極めと、今後の活動のため各地における情報収集」を行うことが目的であった。しかし被災地を目の当たりにすると、今まだ私のやることではないのでは、というのが本音であった。そんな弱気な迷いの反面、何かしなくては、という気持ちもさらに強くなっていくのも確かであった。

## なぜ「田代島へ、 なぜ「観光」復興支援なのか

人それぞれ自分の役割というものがある。得手不得手、職業、生活、そして性格などにそっておおかたの役割は

決まる。当方は「観光」。しかし、このような状況において観光などという話をする、不謹慎ともいわれかねない。観光は地域の基幹産業となっており、観光は地域は必ずなのだが、活動の一面だけが取り上げられ、遊びと捉えられ、そしてそれがすべてであるかのように「こんな時期に観光だなんて」ということになる。

しかし、この時期に「今でこそ観光による復興支援が必要だ」と改めて確信を持ったのは、五月二七日に支援活動の内容を決めるべく田代島へ渡ったときである。民宿「はま屋」のご主人・濱温はまぬかさんに、学生ともども支援活動をさせていただきたい旨を相談した。はま屋は六月中頃から釣り客限定で再開することを決めていた。港まで送っていただく途中、ケータイでお客さんに出す酒を石巻の酒屋へ注文していた。その酒屋も被災されたという。このとき、島に人が一人でも来ることにより、少しずつだが被災された産業

が動くであろうことが確信された。

初めて被災地に入ったときは、気仙沼大島へ渡った。普段から島との関わりを持つ私にとっては、島で支援を、という気持ちが強かった。被災地から戻って関係者や関係機関と相談した結果、まだあまりボランティア活動が入っていない田代島がよいのではと、助言を受けた。民宿やロッジが最小限の被災にとどまった田代島の復興は、早期の観光復興にあると私的に判断し、支援を申し出るため五月二七日に田代島に渡ったのである。

## ■ 事前の活動

### ① 支援内容の打ち合わせ

ボランティアセンターなどの活動団体を通して集団でボランティア活動を行う場合は、その仕切りで支援内容が与えられるので、基本的には参加するだけでよい。しかし今回は、個人的な活動であり、内容を一から決めなくて

はならない。そのため、事前の打ち合わせに島へ赴いた。午前便で島へ渡り午後便で帰るといったわずかな時間で

はあったが、実際の活動を効率よく行うためのたいへん貴重な時間であった。すべてが打ち合わせの通りの内容にはならなかったが、島の方と事前にお会いできたことだけでもよかったです。



参加メンバー。

### ② 学生の募集

学生の募集は、松蔭大学をはじめ関係のある他大学にも声をかけた。結果、松蔭大学六名、東京農業大学一名の男子学生が参加した。参加を希望する学生にとっての難題は、授業とお金である。今回のように土曜と日曜を挟んでも、移動日があるので八〜一四講義を休まなくてはならない。松蔭大学では教務課から関係の先生へ公欠扱いの願

いが出されたので、その点は解決されたが、大学によっては個人的なボランティア活動にはまったく関知しないところもあるようで、今回もそのために諦めた他大学の学生もいた。

金銭面は、ボランティア活動の自主性のなかには、当然金銭的自己負担も含まれるものであり、アルバイトなどをして充当した。

### ③作業訓練

今回、二社のメンテナンス会社から洗剤などの無償提供の援助が得られた。株式会社アムテックからは、トイレ用洗剤「バイオボウル」とトイレルーム用除菌中性洗剤「ナバック」。業務用のため、事前に会社から専門の方が来てくださり、大学のトイレでその使用方法を実践指導していただくことができた。おかげで島での清掃活動はスムーズに行われた。また、有限会社サットからは、噴霧用「L—S A T」と置き型「G—S A T」の二種類の消臭剤。

被災地にとって衛生管理は重要な普及支援事業である。二社のこれらの製品は、ともに現状において最高の効果を有する薬品であるとされている。これらの活動や薬品の広範で効果的な活用が必要であろう。

### 田代島での さまざまな活動

六月一五日から一九日まで、五日間の短い期間ではあったが、じつに多様な支援活動をさせていただいた。その活動内容は、次の通りである。

#### ①港の瓦礫の撤去

最も大変だったのが、体力勝負の瓦礫の撤去。島の方々と二度にわたって仁斗田漁港の瓦礫の撤去を行った。使えるものを仕分けし、廃材となつてしまったものを燃やす。若者にも負けない島の方々のパワーに脱帽。

#### ②道の草刈り・枝打ち

島の方々と、ロッジのあるマンガア



草刈りと枝打ち、  
道路清掃作業。

イランドへ行く道や集落道などの草刈りと、車に当たらぬよう枝打ちを行った。使ったことのない機械は危険なので、もつばら箒と高バサミで作業を行った。

### ③ マンガアイランドの「猫ロτζジ」などの清掃

マンガアイランドにあるセンターハウスと猫ロτζジ五棟のトイレ、部屋などと周辺の草刈りなどすべてを清掃した。一部は地震による破損や、一時期被災者の避難所として使われていたため、かなりの汚れがあった。水が来ていないため、水源から汲み上げ使用した。センターロτζジに散乱していた震災翌日の新聞が、改めて活動に緊張感をもたらしした。

### ④ 猫神社の清掃

田代島のシンボル、猫。その猫を祀る猫神社は、国土交通省の「島の宝100景」にも選定されている。その神



漁港の瓦礫撤去。  
体力勝負の作業  
がつづく。

社のすず払い、周囲の草刈り清掃を行った。

### ⑤ 鹿嶋神社の清掃

震災により世話人が不在となった大泊の鹿嶋神社。その内部と周辺の清掃を行った。外部は震災の影響で鏡などが大きく破損しており、元の通りになることはできなかったが、一応の清掃活動を行った。

### ⑥ 水上げと風呂焚き

現在、水回りは復旧しているが、被災当初は井戸水を使用、屋根に風呂桶などを置き、そこから水を落としていた。その屋根の上の桶へ井戸から水を運ぶ。朝夕一日二度の作業であった。

### ⑦ 荷下ろしの手伝い

その場に居合わせると、船からの荷下ろし、各戸への物資の運搬などを手伝った。このような時に行われる日常的な作業の手伝いは、ボランティア活

動として重要であり必要とされていることであろう。

#### ⑧公衆トイレの清掃

公民館の横にある公衆トイレの掃除を行う。洗浄剤があったおかげで、きれいに磨き上げることができた。観光地の公衆トイレの汚なさにはいつも閉口するが、まずはきちんと管理をすること、それができなければ汚いのも災害と考え、ボランティアにお願いするとよいかもしれない。

#### ⑨自分の世話

観光での宿泊と違うところは、日常生活と変わらなく働かなくてはならないこと。料理は民宿でつくっていたのだが、お膳の用意、後片付け、お風呂の用意、布団シーツの洗濯、部屋や庭掃除、蔵の清掃などを行う。

振り返ると、じつに多様な活動を行っている。学生にとつて、井戸の水汲みなどは初体験だったであろう。神社

の社の中を掃除することも初めて。まさに、島の生活をわずかながら実体験できたということであろう。また、被災や復興状況にもよるが、とくに施設を衛生面からきれいにするということは、直接的な復旧・復興につながるこ



「猫ロッジ」のトイレ掃除と室内清掃。

とではないように思われるが、たいへん重要なことだと実感できた。

#### 観光支援による復興を

田代島を訪れる観光客は、猫に癒された人（猫客）と釣り客が中心である。秋には、釣り客と猫客で一日三〇〇人から四〇〇人の来島者でこつた返していた。しかし、今回の震災により、七軒あった民宿のうち営業可能な民宿は三軒となっている。

しかし、このような状況の中、島の民宿が再開して釣り客をとることににより、次のような他産業が動いている。

- ・ 酒屋などの小売店
- ・ 土産品製作会社（障害をもつ方がつくっている）
- ・ 魚の仕入れ地元漁師・市

場

・食糧やミネラルウォーターなどを共同購入する石巻市のスーパーなどの店舗

・釣り船などの燃料購入先

・キャットフードなどペット用品販売店

・ポストカードなどを送る宅配便

・家屋や釣り船修理のためのホームセンター

・ペンキ店

・寝具店

・テレビなどを購入する電器店

・電気・ガス・水道（宿泊客があると大幅に増加） など

まだまだあると思うが、このように、釣り客を一人とることにより、さまざまな産業が動くことがわかる。観光が「総合産業」といわれる所以である。

被災地において、動けるところはほとんど動かしていくことが求められている。そのためには、どこかがまず動くことであり、観光客一人を動かすこと

は、その手段として格好のことといえるよう。

### ■「田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト」

宿泊については、まずは釣り客を受け入れることから始動し、受入体制を整え、徐々に猫を求めてこられる猫客を受け入れる方向で動いている。

平成二三年六月一〇日に募集を開始した「田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト」の「一口牡蠣オーナー制度」申し込みは、当初の三年の予想を覆し、わずか三ヶ月足らずの八月二十九日に目標である一億五〇〇〇万円（一口一万円、最終申込者数一万三三四九名、最終申込口数一万五〇五九口）に達した。

支援金は、牡蠣養殖資材、漁具などの購入費用に五〇パーセント、「猫基金」に一〇パーセント、その他経費に四〇パーセントが充てられる。今後は、とくに猫関連整備と観光振興に使用することとなっている猫基金を、いかに



2回目の漁港の瓦礫撤去作業。

有効に活用するかが課題であろう。医薬品など猫の健康管理、キャットフードの購入などのほか、猫の墓などとも早々に計画されており、猫のゆりかごから墓場まで、さまざまな場面に対応して基金が使われていく予定である。

また、海産物など田代島ブランドの育成・確立、家庭など消費者に直結した販売促進のためのアンテナショップの整備・活用、魚介類の加工品の製造などの構想も進みつつある。

このように、負をゼロに戻す作業と同時に、さらに先を見据えたプロジェクトも確実に進み始めている。

### ■ 若者たちが得たもの

参加した学生たちの感想は、以下の通りである。

#### ① 五十嵐祐介さん（松蔭大学観光文化学部三年）

もっともうれしかったことは、島の方々と一緒に夕食を食べながらいろいろ



早朝の漁港にて、島の猫に癒される。

ろな話をし、交流したこと。もっとも感動したことは、お年寄りを大切にしている島の人々の姿。もっとも辛かつ

ことは、島の方々と交流ができたこと。また、ボランティア活動中に仙台在住の見知らぬ方から刺身の差し入れをい

たのは、初日の草刈り。もっとも考えさせられたのは、水の大切さ。もっとも勉強になったことは、島言葉にふれられたことと水道を使わずに生活するということ。自分の人生に影響を与えたことは、今後、震災が発生したときに田代島の生活を思い出せばうまくいくのではないかということ。今後は、さらに島のご要望に少しでも応えられる支援をしたい。

#### ② 古川裕介さん（松蔭大学異文化コミュニケーション学部三年）

もっともうれしかった

ただいたこと（田代島発信のブログで私たちの活動を知ったとのこと）。もつとも感動したことは、田代島の自然の豊かさや景観の美しさ、そして刺身の美味しさ。もつとも辛かったのは、港での瓦礫の撤去作業。もつとも考えさせられたのは、島の観光復興を助けるのは、災害の状況にもよるが、「ボランティアとしていくのがいいのか、観光客としていくのがいいのか」ということ。もつとも勉強になったのは、復興時の観光振興のあり方について。自分のこれからの人生に与えた影響は、農業や漁業と観光との間に、大事な結びつきがあると思わため感じられたこと。将来、農村や漁村で働き、地域の資



漁港の瓦礫撤去の後、島の方々と一緒に。

源を活用して商品開発をしたい。

### ③山口 凌さん（松蔭大学観光文化学

## 部二年）

もつともうれしかったことは、被災地の方々からいわれた「ありがとう」という言葉。そしてみんなで楽しく食事をとれたこと。もつとも感動したことは、被災地で暮らす人々の復興に向けた精神の強さと前向きさ。もつとも辛かったことは、なかなか島の方たち向けられなかったこと。もつとも考えさせられたことは、被災地で生活することによって、今まで何不自由のない生活をしてきた自分自身の考え方・行動のあましさについて。もつとも勉強になったことは、どんな状況下においても希望を持って周りの人と協力して生きていくこと。自分のこれからの人生に影響を与えたことは、最後のミーティングで島の石川さんいわれた「自分という人間の人間性」。今後田代島でいたいことは「にゃんこ・ザ・プロジェクト」に携わること。また、田代島へ行きたい！

#### ④小嶋一秀さん（松蔭大学観光文化学部二年）

もっともうれしかったことは、震災の被害にあった方のボランティアができたことであった。もっとも感動したことは、初めて離島に行けたこと。もっとも辛かったことは、風呂が入りづらかったこと。もっとも考えさせられたことは、ボランティアとその積極性について。もっとも勉強になったことは、地方の離島の現状を見聞きし、少しでも体感できたこと。自分のこれからの人生に影響を与えたことは、島で働くことが選択肢となったこと。今後、田代島の支援活動については、一ヶ月ほどは続けて手伝いに行きたい。

これらは、学生たちの率直な感想である。震災復興ボランティアで得たこと、震災復興と観光振興との一見異なった支援の両立、そして今まで遠い存在であった島の生活体験など、学生にとってのこのわずか五日間の体験は、



定期船で港に到着した物資の運搬作業を手伝う。

何事にも代え難い深い人生経験であったといっても、決して大げさではないであろう。

現在では、本土から水道も通い、大型重機も入り瓦礫の撤去も大幅に進んできた。私たちのたった五日間の支援は、島の人々にとって決して満足いくものではなかったかもしれない。しかし、少なくとも私どもにとっては、災害という最悪の状況の中で島に足を踏み入れ精一杯働けたことで、参加者それぞれがさまざまな人生の教訓を得られたと確信している（そのほか、北島直人さん・松蔭大学観光文化学部三年、三橋健太さん・同、鴨志田隼輔さん・東京農業大学地域環境科学部四年が参加した）。

#### おわりに

八月五日、三度田代島を訪れた。島にはユニボなど重機が入り、瓦礫の撤去は大幅に進んでいた。

今回、私どもの受入れに尽力いただ

いた濱さんから、ボランティア活動を  
実施するときの注意事項として次のよ  
うな視点があげられた。

①目的が明確であること。そして島に  
その目的がはっきり伝わっていること  
が大切。

②実施のタイミングが重要。タイミン  
グが悪いと島としてかえって仕事が増  
えることとなる。

そして今回参加した学生に対しては、  
「今回は五日間程度であったが、その  
程度では島を理解することはできない。  
島の生活はそんなに生ぬるいものでは  
ない。船が欠航すればじつと我慢し、  
それが二日、三日続くこともある。島  
を知りたければ最低一ヶ月は滞在し働  
いて欲しい」との叱咤激励をいただい  
た。

仁斗田漁港の公園では、大津波をか  
ぶった小さな藤棚の葉が青々と蘇って  
いた。五月、初めて田代島を訪れたと  
き、島深くに大空から垂れ下がるがこ  
とく山藤が咲き誇っていたのを思い出

す。来春、潮風に揺らぐ港の藤の花を  
見に訪れたい。

■

### 古賀 学 (こが まなぶ)

観光地域づくりプランナー。社団法人日  
本観光協会総合研究所長を経て3年前か  
ら松蔭大学観光文化学部教授、NPO法  
人観光文化研究所理事長を務める。昭和  
56年日本離島研究会を立ち上げ、以来島  
に遊び島に学ぶ。東京農業大学非常勤講  
師、立教大学兼任講師兼務。内閣府地域  
力創造アドバイザー、国土交通省水源地  
域対策アドバイザー。観光庁観光地域づ  
くりプラットフォーム支援事業検討委員会  
委員及び作業分会委員など。